

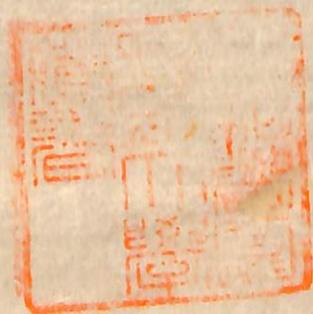
911.3

1

上

序

元祿間。芭蕉翁首唱正風俳歌。與三四才俊俱鼓動
一世。但翁之意不在名利。而在禪悟。故觀世之無生。
以芭蕉之脆。自命其名云。豈非然哉。然翁之句。沈雄
古健。猶如萬尋之松。貫四時而不凋。且夫其角之華
麗。如早梅之破萼。而璀璨於水邊。嵐雪之清秀。如脩
竹之抽梢。而瀟灑于塵表。繼之而起者。去來之幽雅
如蘭。大草之冷淡如菊。皆其選也。往時嘉永癸丑丁
去來大草百五十回之忌。來歲安政丙辰。又為其角
嵐雪百五十之忌。吾友惺庵主人撰翁及四子妙句。



女卓内孫氏尾張大山の母は多し、其母は仕了るを思懐き、
 仰りて貞享年元、其法を解し、心を金剛に懐り、玉堂、永光、
 先聖より多し、得て偈曰、多々、身願、一坊半、化、
 寺住、
 惶、延、法、盡、偶、身、法、雨、入、林、丘、
 分、を、く、く、多、法、を、お、お、ま、ま、れ、く、も、過、
 其、の、法、の、あ、ら、ま、り、亦、判、
 の、の、組、の、門、の、く、く、和、得、の、力、
 を、好、ま、近、江、葉、津、法、を、思、ま、毫、を、結、ひ、佛、の、意、を、号、ま、又、懐、寫、
 懐、來、懶、を、ま、ま、り、の、云、所、為、の、滅、後、冥、福、の、為、ま、三、年、同、冥、一、石、
 一、字、の、法、華、經、を、其、堂、う、り、て、法、を、ま、ま、り、又、孫、轉、を、其、
 人、の、尔、ま、仍、状、の、の、菴、
 集、
 元、禄、十、七、年、申、年、二、月、菴、の、
 寤、享、年、四、十、如、同、國、法、契、那、岳、等、山、藤、馬、場、村、經、塚、の、傍、に、葬、

一翁四拾集

惺庵西馬著

春之部

正月 元禄二年閏正月吟や

元日 秘菴集治船集の撰

探集 元日ト云音便ト云リ

句集 元日ト云音便ト云リ

西有の美徳を以て 宜月 祖翁
 元りや 四毎のりよき 其
 元りや おまのま 秋のこれ
 元りや 有忍ぬ人の 務能き 其角
 元日の炭うり十能 拾遺
 元りや 家より 懐りの 本刀 帯人 去来
 元りや おほのり なる 形も きた
 元りや 吟を 森の を 能 語り 嵐雪

立春

赤州紙ニ春立封を
少きトアリ鶴尾符
ニ似合一也ト有泊船ニ年立
ニ作句選財年少クニ作ル

今朝春

句集共泊船句
撰ニ姿ト誤句解
説最ト王謬ヲ傳テ又今朝
花トス既ニ続虚栗ニ形ナリ
証トスシ

花春

其侘花摘ニ渡海ニ文王初
薦ニ着トアリ泊船句撰初
ユラ誰人ニ作ル誤リカ

千代春

日春

伊勢春

江戸春

年立

年明

初空

初日

三朝

初夢

宝船

宝船句作言子歳立
歳暮ニ成レ

春立や新しき春立き来五升 菊

雀雪や解り来し四月小袖を

若衣をさそ

旅やうかづちちみぬあうらさるる春

古の船波をさかんく春友の

来うき酒興一もさそえたる春

さそ針をあげたる思えりし春

二つあもぬりハキリも春の春

来ちの春あうり年をとる春

赤心をさそく旅人いささそ春の春

面々の輝をけくちや春の春

五十少く四若をさそく春の春

伊勢うき春あやも春たり千代の春

日の春をさそく春の春

春人誰か春あやも春の春

春あやも春あやも春の春

春あやも春あやも春の春

春あやも春あやも春の春

春あやも春あやも春の春

春あやも春あやも春の春

春あやも春あやも春の春

春あやも春あやも春の春

春あやも春あやも春の春

春あやも春あやも春の春

菊

其角

玄来

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

菊

其角

玄来

其角

着水

庭窟

正月奈良三庭井より
ト云フアリノレヨリ始ガカ

松飾

門松

飾竹

蓬菜

着水ノ智急ノ語を慶りともや

言き承り終和はく見世六の

所載のありてまを今も於

叔多きく娘よ武や鹿のうらと

鹿のうらと牛も難意と云り赤子

鹿ありあり

いそ霧くりま海芭蕉の松のそり

松のそりいそ霧あふり人を誰

月雪のちあふあふり門の松

針角何小箱をいそ霧

行合の松のうらとまを今も於

蓬菜まきまのまや修勢のまの便

其角

多砂位のおお松を今も於

たけ小松のそりいそ霧

いそ霧あふり人を誰

枝葉万雪くり松のそり

あふりいそ霧

蓬菜の松のうらとまを今も於

蓬菜まきまのまや修勢のまの便

あふりいそ霧

難信人徳の種を今も於

うらとまを今も於

中を今も於

年神小松のいそ霧小松のそり

年神

喰積

喰積蓬菜上物商
名

其角

其角

其角

其角

其角

万歳

破方自註三代代臣任
人當時哭の高老
祝ひやうたり

筆始

標

藻采

延宝九年、東日記ニ
結ぶトアリ

句撰二年の暮ト誤

空引

娘の君山の歳且題ニ
出ヌ

歳且雜

続藤菘歳且ノ部ニ出泊船全
句撰梅ノ部ニ出ヌ

柯樂キキチヲ遺凡ニ

子日

萬歳や右あうりやうりそ松のけ
まきややぶの時紅雲 四天王
御所の春名庵う年をむま
時之口のそ字う歌四日

大は松の芽新う 免や何併 翁

手搦葉口金ハシ持取

ゆはり葉や口うりそまき葉如 翁

標の母何はまはりやまきうり 翁

元初心感あり

縁をまうり朽路皆采の字松 翁

山家匠事

作舞を皆采う縁原ふ丑の季

空引の堀井の角をたうり也 翁

哨う松のそ松うりやうり 翁

やうりや松うりそまき葉の角 翁

人ゆ思ぬ喜や鏡のうりそ松梅

惟歳と報うりまきうり二日ニ一那 翁

此句ハ晴月ニ日あまのそを人の

事と報せうりやうりされしや

松のそやまきうりそまき葉の角 翁

子供やうりそ松うりそまき葉の角

やうり葉のそまき葉うりそ松梅の角

大松画漢

岳のそうりそまき葉の角

菴下

傀儡師

孟春雜

集元誤りカ

葵の女三初春の前
書くは歳旦三出花

正月初の女三のひさのひさを
うゝ名を能く

も後あふを凡そや初子の玉第

花さのとも告を尾上の番お終

傀儡師阿波の傍門を小唄の丸

喜立をまゝ九日の四山一柳

土用多中男一喜ひよりあを

余興多中

喜を中ハをち能あまぬや初りる

乙女未成の結あ

梅並茶菜彌子の岩花と終り計

嵐雪

生南

霜

大雪

霜

集尾琴三早船の記了

踏歌

敷入

廿日正月

嘆息をある暇り

まゝや祝ふ丹波の若

画賛

浦崎のたをりの喜の鶴のあを

海子川 信一舟

河上を柳うらむるのりも雪

深若

船クををるあまのや喜のり

修人の門あけのや美能喜

帯をぬを神代をり踏歌宴

蕨入やをつるあまをりやさん

正月廿日うらむる報老の形

去来

生南

、

大雪

生南

嵐雪

御忌

霞

延実年江廣小路集の
字を引てあり

御忌

人の世やのとのあふ白能寺を布

摩吟勅進寺路

和歌の御河少やあやの八重雲

あやあや

春ふれや名もあまの山の物

大比叡やを引てをくひと雲

出崎のあまのまるとらん雲のあま

あまあま

春風や人起るはるの三笠山

あま風の名を引切る川に雲の風

はるの川人集の振るるふ塚石哉

春風

春雨

笈の小文に「あはれ水は
り泊船勾掛」云々の案
アイニ「よふ雨」作ル

猿蓑前書アラヌ

深川草庵

あまの雨をくひてをくひて

春風了吹出されり水はあま

笠寺を納

あまの雨をくひてをくひて

よふ雨若水

あまの雨をくひてをくひて

あまの雨をくひてをくひて

あまの雨

あまの雨をくひてをくひて

あまの雨をくひてをくひて

あまの雨をくひてをくひて

あまの雨をくひてをくひて

凍解

小文庫ニカク出熱田
三歌仙ニ露凍てり

よき雪若清水

凍てけり草ふぬるを清水うぬ
ふき風そくうま海めあつていふく
しをそそのもせし只心の路の
病をくるゆふ松のこころきを
娘ふのこ惟然子う不自由く
たもふも興きうき一ふは人ハ
ぬくのこ無をきく人こころ
は喜ちんへく水とのそを
現うせくふ松はあききく山
村望多の松ういつる末のち
そこの他で跡をきく一ふあき

霜

残雪

雪解

雪間

糸遊

暮春ト題アリ

陽炎

小文庫ニカク出熱田
三歌仙ニ露凍てり

小文庫ニカク出熱田
三歌仙ニ露凍てり
六ホアリ後日記ニ丈六のり
三州成ニ曰丈六方ニ空ルト
見エタリ

後又送るちあふふ雪を

木松の垢や伊吹より踏る雪

大草

呂九遊作

踏きゆき雪ふら松や雪道の休

去来

杉却る鳥を人あき雪留り水

其角

雪解雪道の八時あき

雪ゆきり松はつきたる雪うら

霜

入るる日も糸遊の名松うら

枯草やゆき雪平路あの一と寸

伊賀新大佛寺

丈ありの雪うらふ雪うら名のうら

塔山松窟

梅あり梅あり梅あり梅あり梅あり
山里ハ万々ありしつきの花

・ 幸良あり

阿あまの心もあまの梅の花

山 志

手渡^{テヂ}のむきまの梅のきりり

何れの花もあまの梅の花あり

おんやうの梅ありて新と良石

あまの梅ありてあまの梅あり

しるあまの梅ありてあまの梅あり

言梅野也是を考て回本を

石炭と云物ありてあまの梅あり

園山の梅ありてあまの梅あり

あまの梅ありてあまの梅あり

泊船夕撰六門入行りし
のふとまをまのふとまに
まのふとまをまのふとまに
まのふとまをまのふとまに
まのふとまをまのふとまに

梅麿ニ物ウケトス

園女守

暖簾の奥の巾のー水の梅

去来り許(あまき人のあまき)

昔をささる

菊蕚のまーいひまあー梅のま

何り新ハままの二有芳まり

ーを一周忌のあま父梅丸子

のうま中法つーあま

梅まあうむりーの一字あまを之

字あまあまのつー日のあまい路りぬ

あつりーま枝の裂サテ自や梅のま

梅まあまやままのあま眼いり

き角

阿リ 続鹿栗ニ遊大音寺ト前書

宰府奉納

中梅のあまわさあう望老堂

町をまま同窓の梅のあまいぬ

送別

あまあま梅あまあまあまあま

あまのうめ梅あまあまあまあま

あまあま日

あまの梅あまあまのあまあま

あまあま山あまあま

梅あまあまあまのあまあま

元禄十四年二月二十日聖廟

ハる歌所年忌於龜戸所社

類柑子ニあのおもふ年トト

元禄赤骨坊下ト居頃カ

一二三了ニ作ル

詩形連俳合興行一坐

梅 抄りあつむる黄ハハる所
 八のうねるまじや中実結らぬ
 多光るまや隣ハ萩生惣去ぬ
 梅うまや中実結らぬ落の葉
 字一掃一せんあつむるあつむる
 在梅天外ま納
 中実梅ううけふまの涙うれ
 中のゆりぬ脊中を梅の本根
 梅ちや昔のまゆりのうらみ
 外 梅
 ちやまの結をほむや梅の節

猿蓑瓶入作集交作ハ

相雨ぬー糸うをあつむるあつむる
 竹うう結実未あつむるあつむる
 ううらのねるあつむるあつむる
 ぬるぬーたつたのうの雪消
 五月雨のうをぬるあつむる
 ちやまあつむるあつむる
 梅うまむる朝市わさあつむる
 2 梅の山花ふあつむる
 候ー侍り
 ちやまあつむるあつむる
 ちやまあつむるあつむる
 ちやまあつむるあつむる

未

竹葉のあしあしを梅の香
床脇ハ梅さく方の荷ひ茶屋
結りハ梅さく方の茶搦子木

存納

字めく香や湯立の伝花岩の切

屋空う新巻を焚き

冷屋根の梅さくまう煙巾

水仙の伝さハ湯さうめのさめ

箱のむらうを焚き

梅さく香う中さくさめさのらさく茶

春のや中さくまうのふ月と梅

字袋字月待

月梅

妙山家三大類高追悼文

月結中梅さくまうのふ月と梅

詞書

二月月の希あやう一室の梅 月角

和心水推敲之句

た〜く時よま月アさう梅の門

梅さく結ふ梅をぬきさう月角が 嵐雪

箱の真ん中やあさくさくのさめ

中さくまうのさきを味ひ

はうめさくさくさくさくさくさく

さめ柳さくさくさくさくさくさく

のさくさくさくさくさくさくさく

在系寺中

梅柳

天和二年武蔵典基
三段切トシテ手取葉難ナカレ
三韻塞 後下前書アリ

柳

天和三年、虚栗ニ出

言くひきを認り、咲るう嬉柳

積躰く窈一々

を後くのみる柳小木の長し

野ニ社園

冬の旅うやあきまのゆる積出が

腫るのう柳のさる志あへん

あつたるまほをまあへんある柳

見たり柳あふまきあまをうる

中ニヤリ小溜のあふをうるあをれを

ハ九留をうる雨降やあまのうり

傘小柳かアアア柳ノの郡

浅妻船ノ賛ニヤ

奥尾琴序詞アリ

柳小の穂ゆるををををををを

似珠の賢あるを此をあまのれ

柳上登能園

送さる小溜の影見る柳うり

烟書有今幽

懐のある登るうりうりうりの柳うれ

山更上京

黄クオンさうまわの移る糖き柳うれ

曲をうるを世をまのぬ柳うり

五七系よりうる志あへん柳のあ

庭くくく人をまのさる柳共

柳

初鐘ニ戸をうり

見送りの先中五帝うけくく 文彦

菩提山

野老 菱の小女六帖山のト
あり菱日記三山寺より

山寺の心カサ——さ昔とよまはるなり 菊
都ミナミゆととち男んねすき 雀雪

相國寺あり

鶯

うとをまう感ある竹のち中葉 菊

茶や柳のうー後藪の 菊

まをまきや緋小蠹ある椽の先 菊

うとひまの味さむ——きうくぬ 菊
芙蓉や嵐ちうりけ 園のひま 菊
うとひまき茶を——んさうのあや 菊

類柑子三春暖閑妙書
前書アリ 角カ吟ノ終リナ

止丘隅

茶の身を送るもろ 菊この水

うとをまきといふその見さん杉録 菊

茶臼うとまきなる 菊

茶や水ぬるるを 菊 日山

茶粉小まきりなる 菊

うとをまきの世なる枝を割らん 菊

黄や中十日過るも 菊 梅

茶うとをまきりなる 菊 茶の那

うとをまきりなる 菊 出たて 茶

茶や中まきりなる 菊 神のう

故赤穂城主浅野少府監長矩
之舊臣大石内藏之助等四十六

猫意

後集ニ云トテ
撰ニ意ヲ納メテ
トテテ共ニ設ケル

言ハシキヤ葉ノ末畑ノ新肉敷
大草
草ノ下ノ風ふせき

田家

妻ノ小ヤケテテ意ヲ移ルノ妻
猫

猫ノ意ヲ付ケテノおれは月

近游意

京所ノ猫ノ意ヲ云テ
角

ウキ友ノ意ヲ云テ
末

片ノ意ヲ云テ
、

好ノ意ヲ云テ
、

望ノ意ヲ云テ
、

望ノ意ヲ云テ
、

雲雀

鶯集ニ云目トテ
雀亦キ目トテ

京中ノ意ヲ云テ
、

脇味

京中ノ意ヲ云テ
、

京中ノ意ヲ云テ
、

支考辨別

京中ノ意ヲ云テ
、

京中ノ意ヲ云テ
、

京中ノ意ヲ云テ
、

京中ノ意ヲ云テ
、

京中ノ意ヲ云テ
、

観子漢

京中ノ意ヲ云テ
、

多武峯ヲ越テ
越道ニ

其小文ニ云テ
廣野ニ上テ

真野雄琴六近江地名

白魚

一斗ノ積ハ
甲子紀行ノ
序ニ見エタリ

伊達衣三前書如此又野
六番別ノ部ニリ

蜆

瀬魚を祭 孟春ノ月ニリ

春駒

海苔

常陸下向うの戸をぬく時

おとりの人ふ

船の子孫あつ魚かくるあまうれ

海川ふあまを

あまうれをたふさひをてくる墨の取

白魚や海苔ハ下船の罾をさ

一升ハのき海より 規う那

暖坂へ行く人あまうれ

瀬のまつり足すまを後田の奥

まふし里の屋もまうぬまの駒

老婦

堀よりまのりをく老婦まをさ

西雲三喘出る文の煮ヤト
凡ハ初葉ニ干

二月

おとろへやまうれぬ出ー海苔の砂

り水や何ふとまある海苔の味 牛角

黒海苔ハ雪海苔とハふ岩もふ

降健をれま雪粒はうり雪うれ

此物まをまをうりまを泥はう

煮物ーあまうれ何へま

海苔の名やたうちんふ雪と煮 ぶ雪

二月十七日針後山をぬく

裸ふいよのまをうりぬのあまー葉 菊

まをうりぬや火爐の跡を枕をく 嵐雪

二月吉りとく是橋り利後

醫門より入を習

初午

裏若葉ニ其角カ評
アリ

釈奠

上丁日前書ニ釈
菜トアリ釈奠ニ圓

彼岸

この午小松のそま一 天宮林 角

初午小寺にそまりの傍をそまりの
の清子達より祝祭ゆきし

いの字より習ひ初まやまの山 角

重きりままぬく標の終りぬ

常ふひえん菩提の標を前日ぬ 角

授記品ニ喜有魔事

暑一のぬくくあんの夕日け 角

我等今日同^テ佛^ニ教^ニ歎^ス

踊躍スト讀誦一なり

うきいゝ念佛をそまりの標抄より 角

清水彫金

角

臘月

臘松樹トナリ

辛崎の松をそまより 角

おる松よ松松をそま月標より 角

中川やまより松松をそま月 角

な一まよ松の松松の松 角

跡多まよ松松をそま月 角

徳より松文の松

松月一か一松松をそま月 角

野魯所をそま月

松を松の中よ松松をそま月 角

大原や松の松を松松をそま月 角

う松一うや松松をそま月 角

文考の松松の心一松松をそま月

鳳巾

白川の笑う又返せいのりなり
東はくさくさ遊ふや心の静さ
嵐雪

故是の隣にたゞし

はう新瑞あそびぬゆの静あり

惜別

意を引くと見えぬやれ中

行脚惟然(十端)

木の枝うきうきうきやれ中

芦文抄号

意の志れぬをわやりのあり

出代や切あはれうきあはれを

出代やその門に作在はる

大
意

出代

新能

七月より十月まで夜勤

水取

甲子紀行二水取や中
有小文庫二水取や中

選水鳥二選水鳥古集二水取有
異本二選水鳥

涅槃會

南都かあそぶ雨

傘や薪の秋ありとほ

二月堂

水取や氷りの静り静り

涅槃會

神壇や静をいもいも静をいも

佛は天の口入滅一とほいもいも

ともいもいもいもいもいもいも

たもいもいもいもいもいもいも

佛とるささるの静り静り静り

不生不滅の心を

法堂の新をささるを静り静り

其角

角

其角

西行忌

貝寄風

住吉浦三十九日
風ヲ云

丈艸法師元禄十七年二月廿四
寂

二月十五日早集發足

西行の死出後を懐のちりぬれ

名不ハ證のうら

貝よむる風のちりぬれぬれ
翁

文學を嘆息

凡十年の若くは建の懐ぬれぬれ

懐ぬる事の如きを懐ぬる事

懐ぬる事と懐ぬる事と懐ぬる事

懐ぬる事と懐ぬる事と懐ぬる事

懐ぬる事と懐ぬる事と懐ぬる事
玄来

二尺の濁をおこけりて

うらむる事と懐ぬる事と懐ぬる事
翁

仲春雜

文堂裏書三元禄二年仲春
トアリ

龍樹菩薩の禪陀伽王の著

貪欲を去る事

有瘡近猛煙始雖悦後増苦の又

此ま終る

厚庵の以ゆるし時清くは法うりて其角

學をすつ日安ふよ其の名に非ぬ其末

伊賀上野薬師寺初會

初まらるる折も亦ふつとまらるるあり
翁

懐ぬる事と懐ぬる事と懐ぬる事

懐ぬる事と懐ぬる事と懐ぬる事

懐ぬる事と懐ぬる事と懐ぬる事
其角

西行の絶をうりて懐ぬる事

花待

初櫻

小文庫二嘆と云ふ下り泊松
二取中のトアリ

紅梅

接穂

種蒔

種芋

藤花

菜花

巴光ミツウミトアリ
泊船ミツウミトアリ

新を種も人の折も出せしれ
使子身よりふるふ種おそ

竹福も折れぬとせしれ初まら

紅梅や見ぬ意はゆるまきたせ

接穂のり架のつき不や山屋委

見たきふ種も紅梅より接穂は

其の種も種もはあふきし種芋子

種芋や花のそりふ委歩り

よく見世の女あきく種根のめ

修行

菜畑より見種ふるも、見うれ

音子亡跡

狗脊

葎君葉

萩着葉

雉子

葎接門の吟
再葉ニテ

葎の草中坊う灰よく果のそ

狗脊の草葉小揃ふ、とてむりぬ

はの助のなまれたる葎今の画鏡

葎さへりての葉やさしや破を家

遠路尚舎

そのくぬを先とふ萩のそのも葎

葎下をや紙を種る

葎着うをてはんふと心葎のニ葉外

名取ハ萩のう委

姨石より種、のち、たききふらぬ

さる葎より

父母の志きり小意しきりのそ

葎重

去来

霜

葎重

葎

葎

葎

葎

葎

勸進帳山居下題了

雪の宿ふく中の柏子や姫子の雪
城のふくくつハおを後一き一の雪
人うとく一姫子をくつむくのあふ
字はく一き候うく姫子の距カタマうめ

角田川より

あやしく北のる我君さのき一の雪

市川牛牛遊著

一子九龍名をつきはくふ

遠船の父いあつとや姫の雪
世の中い何うさのまき姫子の雪
遠空のふく一き姫の雪はくうぬ
雪のまう一うまんき一の雪
去来

歸隱 寛冬年宗房世歳
時、吟云

燕

笈日記三伊勢部二桶辺下
あり

画談

何の禁能う市や移ちむく姫の雪り
逸世の時
雪く一帰つ友らや雪の活ふ世
去来

若松より

帰る乃冥哉越る勢キホヒ市利
去来

順程よりうをやりけ帰る雪りぬ
可くまうあつあつ雪を海のまう
去来

帰る雪あふく雪や雪雪の蝶雪
蝶雪く雪埃舞く雪う雪つ雪
去来

桶部

雪く雪あふ雪一雪むく雪
去来

自得

蛙 貞享三年ノ吟ナリ正風ノ
姿情コトヨリ定リ玉フカ

蟻を儲^{カミ}子猫を^{子ラ} 穢^チ心^コう^ウ如^ク
 汚嗅^キま^ス人^ノふ^クう^クあ^リま^ス如^ク蟻^ノ如^ク
 左^ノ池^ノや^カ蛙^ノと^シま^ス水^ノの^チ如^ク
 あり^トと^シ蟻^ノあ^リは^ノの^チ如^ク能^ク
 ち^ンま^シび^ク蛙^ノう^クま^シ海^ノの^チ如^ク
 ま^シあ^リや^カ繻^ノの^チ如^ク蛙^ノ
 築^キま^シり^テ岸^ノの^チ如^ク
 田^ノの^チ如^ク蛙^ノを^シ背^ノ負^キま^シて^シ蛙^ノ
 一時^ノを^シま^シて^シ蛙^ノの^チ如^ク
 梅^ノ本^ノ寺^ノの^チ如^ク
 松^ノ風^ノを^シお^シ越^スま^シて^シ蛙^ノの^チ如^ク
 大^ノ字^ノ 大^ノ字^ノ 大^ノ字^ノ 大^ノ字^ノ

田螺

句集宛ぬふ二作

三月

上巳

曲水

紫^ノの^チ如^クぬ^クの^チ如^ク海^ノの^チ如^ク
 芳^ノの^チ如^ク時^ノ
 飯^ノ見^ノや^カあ^リま^シる^ク田^ノ螺^ノま^シ
 里^ノの^チ如^ク男^ノ子^ノを^シち^シら^シま^シる^ク田^ノ螺^ノを^シ
 水^ノ底^ノに^シて^シ結^スる^ク蛙^ノを^シま^シ
 入^ルる^ク蛙^ノの^チ如^クあ^リま^シる^ク入^ルる^ク
 入^ルる^ク蛙^ノの^チ如^クあ^リま^シる^ク入^ルる^ク
 神^ノ風^ノの^チ如^ク海^ノの^チ如^ク門^ノの^チ如^ク
 三月^ノの^チ如^クあ^リま^シる^ク蛙^ノを^シ
 梅^ノの^チ如^クあ^リま^シる^ク蛙^ノを^シ
 曲^ノ水^ノや^カ宛^ノぬ^クの^チ如^クあ^リま^シる^ク蛙^ノを^シ
 大^ノ字^ノ 大^ノ字^ノ 大^ノ字^ノ 大^ノ字^ノ

潮干

海州カ

潮干ト前書リ

青精飯

寒食揚州葉採
漆飯食之陽氣ヲ多ク

櫻

笈日記古主蟬吟公の危おふ
ト了蟬吟子之舎ヲ探丸
名良長家督ヲ糴リ

青柳の浪小志たう、潮干の丸 菊

沙干

貝はくや白沙の末能海を松 青角

水苔のる刀うきあんな草のそや 菊重

そり帆の浪後まき色ぬ沙干外 玄来

桐柳の茂深く、菜めー、う水 菊重

峯のりや一里地まき小山伏 菊

水口まき、少年を踵く

婦人うき

舟ふらり舟ふ活を、梅の丸

採丸子別野

まよりの半地まき、梅の丸

乾坤無信

舟のまき梅見きうを、梅の丸

舟のまき梅見きうを、梅の丸

山家

鶴のまきう嵐のあはさきう、梅の丸

扁のまきうむのちや、梅の丸

木のまきう汁の、梅の丸

茶平別野

年の中まきうを、梅の丸

春の萩ハさきう、梅の丸

猿のまきう酒屋まきう、梅の丸

上野清水書少く

歌二木のまきうトアリ三州紙
非向集二木のまきうトアルハ
書指カ

集在琴鶴の葉より異本鶴
ト少花の葉より其の秘書言

鐘のけり志のゆきりう能櫻うぬ

妙鏡坊をう茶送る能く小

ふいあく小櫻さう一歩を便うぬ

大悲心流の巻をん侍うう

滝原の巻をうあうまうう可那

朽う殺生傍盜あり

あ夫ありうう能く五戒のまうう車

仁心寺

輪法寺のやうう木ありう一櫻葉

雨後

櫻ちるやまを五白ハ物を能う

唇を思う吸う櫻一の都

句兄弟貞聖カ吟ト兼リ

山櫻

延享五年上野吟す

朝さうとう一雪深一や夕櫻

生先う見一枝をうん花さう

雨降中書ハ

雪原の尾朽うう輝らんハ櫻

初遊まう人うをんあうう

うの巻を帯る人や初遊の山さう

丹本のさうう瓦をくその先を先う

歌うその先遊まう一山さう

と鑑破

雪まうう山僧あをうんや櫻

句雪へのまう

異本ニより雪やまうトアリセト凡
知泊船ニモ昔書ナリ附會ニヤ

陸奥蘆澤世の北ニ如州島春納
トアリ

うらやまー浮世の山の山さくら

おより能車小橋や扇又櫻 其角

山橋鏡あふーま借あ〜ん

遊楽知山之句

小坊多や 抄くーのさくら山櫻

ハッ色の山のさくらや一志伴

芳野山さくら

咽星やさくらさくらぬ山さくら

やまさくらさくらねさくらさくら

秋光山入横

あまさくらねねおとさくら山櫻

老の痛のさくらさくら入山さくら

櫻狩

糸櫻

桜狩さくらさくらさくら五生山

心あやーや豆の粉りー山櫻さくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

身をあける縁あり常さくら櫻

桜川さくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

練木よるさくらさくらさくらさくら

さくら柳やさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

家櫻 八重櫻

菊

其角

其角

其角

其角

其角

菊

逢櫻

花

延宝元年吟也

天和吟す

西華集 餞別上云

黒云ゆく

万日の人跡ちりもや庭梅

紅毛もあけり 春中布衣ふるふ新

憂方知^レ返^ル聖^ニ始^テ梵^ニ神^ニ

花より浮世我は志^レ移^ルく^レ良^ク思^フ

堀堀もあけりも世の^レ花^ノり^ノ香

此より^レ世の^レ花^ノも^レ念^ノ舟^ノり^ノ香

あま人の山あけりいささ

権の本^レ花^ノも^レう^レり^ノぬ^レも^レう^レ葉

花^ノ吹^ルて^レ七^ノ花^ノ見^ルる^レあ^レそ^レう^レめ

物皆自得

あま^ノ遊^ルふ^レ比^レふ^レ信^ノあ^レる^レ友^ノ免

露河門^ノ花^ノの^レ花^ノを^レう^レ四^ノ生^ノ天^ノの

葉^ノも^レ山^ノ見^ルる^レあ^レひ^ノの^レう^レ増^ルま^レう

あま^ノ遊^ルふ^レ比^レふ^レ信^ノあ^レる^レ友^ノ免

信^ノ正^ノの^レ信^ノ世^ノを^レい^レて^レあ^レ頂^ノ山

日^ノの^レま^レあ^レり^ノ花^ノの^レ香^ノ枝^ノみ^レ

花^ノの^レ林^ノま^レり^ノ花^ノを^レい^レて^レあ^レ世^ノを^レ

あま^ノれ^レあ^レ利

観^ノ音^ノの^レ荒^ノ見^ルや^レり^ノつ^レて^レ好^ノの^レ香

古^ノ香^ノや^レ花^ノの^レ枝^ノ出^ルの^レ枝^ノひ^レま^レり

花^ノ門^ノ二^ノ句

花^ノの^レま^レや^レり^ノ戸^ノの^レお^レ産^ノふ^レき^レん

花^ノの^レま^レや^レり^ノ戸^ノの^レお^レ産^ノふ^レき^レん

芳野紀行三句出後句再
葉二十

結唐栗三ノ風外の橋再業
裏若葉三其角の詞書アリ
琴下太鞍下進下ノ讚其ツ
ナリ

初葉ハ日ハ花ハ草ハまきまき
トナリ

油紙一宗無草トナリ

鶯の葉ハコハなつとまき花の葉ハ一ハ 小菊

琴下太鞍

ちうとまやまのやまのやまのやまのやま

花の葉ハ

中江の葉ハあつとまき花の葉

あつとまき花の葉ハあつとまき

あつとまき花の葉ハあつとまき

あつとまき花の葉ハあつとまき

あつとまき花の葉ハあつとまき

あつとまき花の葉ハあつとまき

あつとまき花の葉ハあつとまき

あつとまき花の葉ハあつとまき

花の葉ハあつとまき

あつとまき花の葉ハあつとまき

涵清堂記文集了昌集
二巻の津子

女子の招きや本郷を叙して

海濱書院

四角より見たる山々の形

是の二年 津子一巻の序

梅香堂の梅香堂の序

海濱書院の序

若小孫娘の如くはるる家の業

檀香堂の序

地へ海濱書院の序

孤石の如くはるる

中野の序の序

嵐山

静の毛髪之如くはるるの序

借書院の序

是の序は上巻の序

子集

快楽の如くはるるの序

一巻の序

の如くはるるの序

展覧の如くはるるの序

是の序は推してはるるの序

五巻の序

是の序は上巻の序

我儂落あう物森ゆーり

其角

口痛寺の傳と連歌のつと

岩屋

さう酒傳と小体ん 誰 為

清春と清水小遊

車とて花見を月夜や 赤山

あまを若きそ 心そん人そ誰

花折そ人の味そ あはれそん

花を秋そあそん 友あそりけり

そり花をそあそりそ 文婢集

森そそそれハ 持家あそんあまの山

地酒や花のあふハ 松そり利

大佛 珠うけむんそ水の色

神力品現大神力

法のそあそりや 言はそたそそ

あそそそや 清波そへたそそ是の心

花雪のうそそそ 花そん新あそり

あそそそや 心よりあそり花の山

あそりそそ 心そりそ 心け酒能伝

新替あそりあ新あそりや 山 花

あそりそ 心 心け酒能伝

あそりそ 心 心け酒能伝

炭俵ニ煎好トアリ句集ニ
煎好のニ作トリ

と世を後とすむ程多子形

有り大井川ハ川城あり左本

唐一室の風の何々吹す

手板ハ冥のありありの世の世 嵐雪

晋子中陰回向

と世を後とすむ程多子形

満の盤子二十年來ハ面ハのり

年をありして他の嗣をゆき

形一未熟ハ身んて半句を吐

かささささささささささささ

若夫をささささささ大慈悲ハ

南之山ハあり

善化さうぬ白の跡うそそ

志はく教うあまの舌能先

道遥遊鶴之間中ハ是れは後

世の世は身をわすれず

原の志を困る勅使の傳系中

世の世は身をわすれず

山ハありささささ

あふを味く味く味く味く

砌のまあ世を縁よき世をふ

志ありして用をあんときさ

とらんゆめささささ

小重井の志ハあり人あり

合ある極る集合たり

富士を見ぬ人ありあらん花の山 嵐雪

小町續

我高子目も鼻も遊き花の色

湖上花

あり今暇入り志度の浦 玄素

南都の般若寺あり

ちり跡る花や般若の紙の留

寒紗も用きこの不あり表紙花

あやもちり花や紗のあはの山

花や白きうら我は花を

ふり山ありあはるうらふ花を

小納千を尾まつりや出の花

をよははあのみあをり花を

山源を分り

木の空能天物も今も花の友

田上の石へ花をうらまの

海をえんる月つきあはる花の色

咲き浮世の人や花を

立枯の跡り多き花の中

解くも心もあはるもあはる花の色 玄素

角入一人を可なり花の友

花をえり田上りのあはる花の色

白妙有り秋あり花を

更にお刺修る細を憐——と果

——

疎短ぬ先ころそ花のころ健きなり
 花ちりや翠き合ふる岩の穴
 水壺ころうはるや花の人出入
 片麻ハ岩ころのあころむむ——返
 ちりころのあむろころ——おけ丘の程
 本陣まや枯木をささのそ花の舟
 笠程ころ翠きころりなり花の友
 小翠のあむつぬ布ころや花の下
 夕暮や花影ほあまあははるこ
 花あむ奴を花見ころる誰う野のさ満
 花見

花見

古今抄二即興体ト云

系法も花見のさあハ七を問

修通う情奥う趣く時

学ちころそあころの花見——とあまよ

玄席子ころ深川の橋合を初

花見みころるあ存——柳——原

と野のそ花見ころあつう作——あ

人ころ帯ころあまころる物の芳あ

うたのそりころあころあころる

ころあころの松あけきたあころる

四つ五葉のそ花見あまあころる

綾屋妻奴の種をいころる

ころあころあころる

傀儡の被うつある花見の如し 其角

雑司の墓

丑元集頭書三篇の花見の如し
られぬ甘き入水の如く
サトウ

山見の人を河の流る花見の如し
屋形舟を女中に出汁里
去人うあししくと花見の如し
去来

花見の如しと花見の如し
何よりと花見の人能く
、

うらみと花見の如しと花見の如し
塗橋の如しと花見の如し
、

花見

山見の如しと花見の如しと花見の如し

花見の花

花見の如しと花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如し

花見の如しと花見の如し

月花

月花句曠野側
柳子花未出ス

笈日記三聖人の筆

挑

月夜やまきくまのり星の山 文子

伏見西岸寺

我意より伏見の桃能事きを 翁

吹ハハ餅みそ作を秘そこの世

尚白と浪舞下る

たゝ一転桃より寄つる木幡の風 其角

あ市原のやみふ桃去の鈴の音

花ささふ不極や能舞岐の鈴をさる

菓子もさるり市一人形や桃の意

舟のくね桃の巾一紙や等林陰

海棠のよも能ら侍りや樹 自 其角

畫巻

鄧陽

裾山やね吐あきの夕侍 翁

屋の体くひとそ松店小橋を

うまやう

つー活るま陰水干鯉さく女

小多居ハ紫雪の神う流ー山 其角

旦夕の端居もーむる激踏可礼

咲たをう集ううまぬやつー山 文子

さーのそく悲へ流ーの鳥か

西河

る流くー少吹ちまこの流の音 翁

畫巻

山吹やま流の桃能事さる時

棟棠

白集棠の下り

山竹や 笠より さきき枝の取

立者 退善

山ふきのう 笠より さきき水可取

晋子 善系

中ふきの 笠を 笠より の 笠はとる

大和 好 紳の 肘 舟 波 市 といふ

あまの 笠を 笠より さきき 水可取

笠 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

笠 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

笠 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

笠 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

酒書

藤

茶摘

櫻麻

董

若 藤より 藤より 藤より 藤より 藤より

第 七

山 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

山 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

山 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

山 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

本 白 字

山 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

大 姓 山 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

山 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

特 呂 丸

山 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

鳥歸

山雀のさきさきうささかひのせいのり
去来

鳥入雲

广河止觀^二一目之羅^{アヒ}不能得鳥
得鳥之羅唯是一目は又の心を
をささう甜さうささうのりさうの
其角

蚕

孫ももの聲や—まふ日而可なり
、

春暮

室の八鳥ニテノ待つる
久テノ舟來ニヤ 春夕暮春
トウ作ニヨルヘシ

入水の鐘のまきまへささきの音
、

行春

川の暮やささき 服の中
、

詞書細道ニテ

ゆき暮やささき 魚の目を
、

望別
望別水踏暮

三月盡

新暮ををいのんをささき
、

雜

竹のささき—まきまへささきの音
、

布袋画僕

そのり—や袋の中能月を
、

大堰川道遠

暮中今水う新やささき
、

四月

青簾

更衣

履

吉野ヲ出テ奈良族中
吟テ小文摩ニ世系小

白重

裏表白平絹
氣候冷ナル時
重テ着ヌ

夏之部

此の部は木下や四月

卯月白母了

方中より衣うへき卯月

五位の位をききし

是より脱るうへき卯月

其後屋うへき卯月

培魚の意をききし

此より候るうへき

風光別我苦

霜

其角

霜

霜

其角

霜

夏月

延宝七年向田三郎一平
赤坂ウツア

明不夜泊

晴きやまのあきまきまの月 霜

白きあきあきあきあきの月

夏の月清酒をくぐりて未飯や 露

あきあきあきあきあきの月

鳥九刺髪きし付垂^ス祥 文子

那波野光臨寺

夏山や秋満里を名時分

夏山や秋満里を名時分

夏山

夏雨

夏海

吉野松島ノ吟翁
捨玉ヲ知ナリ

夏川

夏野

三州紙ニ初葉夏馬
キトアノ向撰枯野謀
陸奥街ニ那頃の黒羽ノ前文
アリ

秋の月満里の空閑ふしめ

涼を秋にききあきあきあきの月

あきあきあきあきあきの月

あきあきあきあきあきの月

あきあきあきあきあきの月

あきあきあきあきあきの月

あきあきあきあきあきの月

あきあきあきあきあきの月

あきあきあきあきあきの月

あきあきあきあきあきの月

あきあきあきあきあきの月

夏坐敷

灌佛

三州節ニ再業トテ
統様表泊船運業
會テ了未詳

くーまひを怖る

を飯き人小たへんをよま時うれ

秋時多の鐘系う第也

山は海もらあま入るねま味き

灌佛や鯉子あまも珠鼓の音

まああや

灌佛のうらまをあふ花の子うれ

上行寺ニ也

灌佛中 控子別 寺の

灌佛やまうりあつへるあま

佛まふの母の母ハま

まうりやまふハま

夏籠

夏書

扇

夏籠や母う方のを佛生名

夏又の遊

あまうりあまうりあまの海

傾城の夏書や

扇行也

あまうりや我ハ扇の音をあつ

破扇の圖

あまうり後祭へあまうり扇のあ

あまうりあまの民家の門小本

あまうりあまのりて五尺をり

あまうりあまのりて元木

あまうりあまのりて未熟をり

汗拭

汗襦袢

あまのきり衣ふくもん新を巻

京竹のきり人きりさうり文

きりたり送りきりきりさうり

きりさうりさうりさうりさうり

汗汗のわいさうりわいさうり汗拭ひ

能見巻

汗ぬくひ小物さうりさうり汗つ風

きりさうりのわいさうり汗拭

竹婦人竹のきりさうり汗拭

あまのきりさうりさうりさうり

一人きりさうり

汗汗のわいさうりさうり汗襦袢

牡丹

豊田三歌仙日記二六
牡丹ふくまで遠くさうり

牡丹二巻馬画す

尾張さうりさうりさうり

牡丹牡丹茶湯さうりさうり降の名跡水

松崎新巻自画漢

さうりさうりさうり牡丹のきり

わいさうりのきりさうりさうり

能見巻

あまのきりさうりさうり牡丹のきり

海老親心寺

柿のきりさうりさうりさうり

雨意巻さうり

ハキをさうりさうりさうり牡丹のきり

古巻さうりさうり牡丹のきり

嵐巻

燕子花

玉裳たまはらくくく玉衣たまゐの牡丹ぼたんの

大坂おおさかをあら人の許もとへ

牡丹ぼたんは花はなのやうにうら

山崎やまざき宗鑑むねかみ屋敷やしきを近衛ちかゑ殿の

宗鑑むねかみくまのくまをえんはこつま

はくくく遊あそびくまをばき

あま心の申まをすひ

あまうきまをくく牡丹ぼたんは

山崎やまざき宗鑑むねかみ屋敷やしき

牡丹ぼたんは花はなのやうにうら

淡園たんゑん寺てらは

水漬みづぢく細こくまをあら

中角

向元むかひもと作往むかひもとカ向むかひもとと番ばんり

嬰粟

牡丹ぼたんは花はなのやうにうら

牡丹ぼたんは花はなのやうにうら

淺野あさの宗義むねよし士しを悼なげむ

浮世うきよの縁ゆかりを引ひきあら

高田たかた宗子むねこあまを

あまをあら人の許もとへ

牡丹ぼたんは花はなのやうにうら

牡丹ぼたんは花はなのやうにうら

牡丹ぼたんは

白しろくくく牡丹ぼたんの

淡園たんゑん

宗鑑
宗鑑
宗鑑
宗鑑
宗鑑

0円
6円)

其の文三項ノの文不

葵

菜黄

菜黄三種アリ山ノ
五月ニ熟ス

澤浮

海土ハ新チマツ見らるるヤ女子ノ世

成リ深ハ風ニ大ノチ乃女子ノ世

舟葉ノ一候留多クヤ一ノ花

多クヤ馬楸仙也るる女子

之河風来寺

而本ノ葵をのちる山流ノ風

元禄七年ノ一ノ終りるる

糸ノ終りるるヤ一ノ終りる

終りるる葵也るるヤ一ノ終りる

水花ハ親像也一ノ

澤浮ノ花一ノ終りるるヤ一ノ終りる

山菜黄ノ一ノヤ一ノ終りるる

五十

角
来
子

来
重

来

来
重

桐系ノ一ノ終りるる

まゝのりノ文葉ハ進まされる

終りるる物ノ情ハ志をるる

終りるるの口ハ志をるる

終りるるの口ハ志をるる

終りるるハ一候をのちる

終りるるハ一候をのちる

終りるるハ一候をのちる

終りるるハ一候をのちる

葵ノ花ハ新チマツ見らるる

終りるるの浦也一ノ終りるる

荆

陸奥衛泊船よりつらつら
今能見堂下書

若葉 後日記泊船ニ青葉

麦の穂中 飯小深く
五月十日 武府を出て
越え人々川崎まで送る
船中の句をいふ

麦の穂をたたく
能仁寺 麦つく
馬士の如く

燕居

此の夜に新麦
つらつらの穂を
招提寺

日光山

あつた青葉
新樹の
大垣の城
きつたる
某の寺

茂

新樹

高久町藏
光り下り初葉

藤の露
眉山
蕙母

蕙母

菊

生南
光堂
光堂

光堂
光堂

夏木立

夏木立のついでに
杉林全
杉の葉サシ
木立

夕暮や志半の川
雲岸寺

木立のまはりに
幻住庵

先達の心櫃の本
次庵

次庵寺のまはりに
清浄や波のまはりに
水立のまはりに

木下開
夏小文ニ次ナ寺ヤ
ト下有磯海ニナリ
常盤木落葉
清浄ヤ波ノ
葉ノ葉ノ再

若楓

常盤木のまはりに
清浄のまはりに
若楓

桐花

桐花のまはりに
然此のまはりに
若楓舎

柚花

嵯峨日記ニカク出小文
庫泊船ニ柚の花小昔
を忍小二作八

柚の花のまはりに
後河の園に入

柚の花のまはりに
件亡う木立のまはりに

盧橘

稚花 詩六方韻塞モカケリ
 續猿蓑旅人の推の花
 ハ書損ス

辨別

稚のそは心ゆゆ水と木芽の枝
 関のほ素牛大垣の松店を切
 せけり〜ふうは藤〜紙とさ
 う〜のそきん〜は京祇の葉

白ゆき

藤實 白船秋ノ部ニ入
 諸集夏ノ部ニ入
 タリ

椹 天和辛酉粟ニ下

卯花 白撰ニ櫻を了ト繋

夏のそハ能知みきん 夏のそハ
 椹やそあき椹の母松 海
 椹 無々うのそあむさ〜うん
 牛角の母五七夕返美
 卯のそは母あきをさ〜ま〜

菖

卯のそは海のこ〜うや然雪山
 卯のそは能知みきん 関の門
 卯のそは能知みきん 新瀬山
 小精の境あり
 うきふや卯のそ〜あ〜人の果
 卯のそは能知みきん 関の門

海松

老僧の筆をきりて
其角

祝産育

筆のほろしる
其角

此のふや
其角

竹のふや
其角

巾のふや
其角

武士の子

筆のつら

望海親述

海松のふや
其角

海松のふや
其角

子規

天正辛卯吟
泊船集三福寺
二作九誤

海松のふや

海松のふや
其角

海松のふや
其角

海松のふや
其角

海松のふや
其角

海松のふや
其角

鉄拐の筆

海松のふや
其角

海松のふや
其角

海松のふや
其角

意見の海

海松のふや
其角

陸奥衝六声や横之六声
竹六横之六声や諸集二
声横之六声たり泊徳カ
判三前章二定之玉つ
ヨシ其日記ニ書通リ
泊船京子居之たり

其日記大竹抄下リ
其日記泊船竹系下リ小
文彦月之たり
伊達衣寄夏州下題下

そちのく一尺の葉の回り六
那波の志此くも尋そ教生
不見んといふまはるやも小面
あり出書世ハ先は交ふとあり
落為くわ多入の寄のわくまは

那波堂あり

不卜一周忌夢風無行

鈴之の多や あまき 仍 第
多観を多横之あや 水のう
一初之のほく横之あや 杜 碓
京のくも京のくもや 不くま

以 碓 中

鈴之大竹葉をそる月夜
杜橋を多横之あやの 中く花を
不くまはるや 五尺のあやの草

三一年書たる初

名之くも年や持さん 鈴之

仙臺あり

田中書中中あり 市の杜之

後 石 伝

又えさや柳也立く の不くまは
あきそのやさる初りあふ出師
木うくまはる 第橋と中や杜橋

鳥賊賣の意うききし杜宇

曉の暁をきききふや 候ききき

不ききき一この 栲の栲の可取

子ゆききき栲ゆきききききき

葉名少々

栲の栲をききききや 部 口

杜宇人きききききききききき

卯月十七日あき人の夢子小

候きききききききき

部 口候深きききききききき

候きききき

杜宇人きききききききききき

空角

宰府志納

不きききききききききききき

不きききききききききききき

不きききききききききききき

傾産

不きききききききききききき

母きききききききききききき

きききききききききききき

不きききききききききききき

不きききききききききききき

不きききききききききききき

伊勢法宗

鬼堂

心小亭松栢をのりおきまは
橋を喰ひはらむ一節は
村を去りや村々の麓一宿

特異子母

修入る言も形しこれハ冒
汗成まら時の香る助を村
心も然らり付るゆけ時

晋子逃美

鐘の偪ハ逃路をまゝの節は
あまらけ修やまを修十五字
うのま出せ山の入まらむ
兄弟の顔見えまや村を

玄来

去れまらむ色修りまの村を
新たまふふ一宿りまの村
若きもや修右刀やまを修
明く修の言修まらむ名出修
横雲のまや山ありの新は
慈雲うらまらむのまああり
初まをまらむ

あらの身もあまらむの村を

西山へ行く

新まふまらむや内修の子規
修まらむ修や湖水のまらむ
まらむまらむの村のまらむ

大子

子幼澄より上のわさりの粉
川越の逢中 小太のや新
菜種うら禁や望風の杜宇
杜鰲誰よりやさん川曲の
情のなまじりや一まふのなまじり

嘆喙少く

若遊の森入るや 藪の部

木吾川

ちの世木や毎のつとけ子幼

月秋の松原小路少く

狂龍のまゝいりや舟小舟まき

遊兵部寺

閑古鳥

茅のまきを傳ふやまき
屋敷棟の麦や梅より出や杜宇
森やすつや梅田杜鰲表新
杜宇たつらや岸の子松茸
ちの世木や毎のつとけ子幼
ちの世木や梅も梅まき
粟作舟やゆりや京のやまき
いそや壺多ふまき 部
うき我をまき 一まふのなまじり

雲中

風やあまの末やうんふまき 其角

信正の書

行々子

老鶯

別坐敷三旅中より
聞下り

鶉飼

健ら小貝子く傍り深古亭
 次子のやまうしろ中何をもまを
 ずくくく出せ侍何ううん古亭
 能あ一の休むう一赤をけく子
 四をいむまひ一源川の庵を
 主出くくく
 琴や竹の子敷う老をまく
 鶉舟も通過了るく小舟くく
 ねも一移うくやうくやまき鶉舟
 ねぬ鶉のあむく小舟舟毎うね
 鶉うくく一里くまうく家のね
 見物の大小くくくさるさる鶉舟
 去来

鯉

葛松原陸奥衛泊船集
 等鎌倉トア類掛子
 二鎌倉トア
 木智前書了

慈母表中

ちん小舟の中あまの鯉
 細念を生きくゆきん初うき
 松魚うりりある人を鯉くくん
 名ある海を居まじく鯉うね
 戸塚
 鯉荷のあまの己のり能を具式
 帳をねねの舟が鯉う残くく色
 ちのくねまのさのくくくく
 うた森のさうくくくく鯉うね
 ねまの鯉う
 伊勢あまの松魚あまの河邊
 大勢の中小一本松魚うね
 飛雪

おのり火を本との茶や茶の岩
茶の石小茶の茶をふ茶の柳
空の治まへ

茶をみり茶の茶をみり茶の柳
茶をみり茶の茶をみり茶の柳
茶をみり茶の茶をみり茶の柳

茶をみり茶の茶をみり茶の柳
茶をみり茶の茶をみり茶の柳
茶をみり茶の茶をみり茶の柳

茶をみり茶の茶をみり茶の柳
茶をみり茶の茶をみり茶の柳
茶をみり茶の茶をみり茶の柳

茶をみり茶の茶をみり茶の柳
茶をみり茶の茶をみり茶の柳
茶をみり茶の茶をみり茶の柳

妹千子分まわり茶をみり

茶をみり茶の茶をみり茶の柳

茶をみり茶の茶をみり茶の柳
茶をみり茶の茶をみり茶の柳
茶をみり茶の茶をみり茶の柳

蝸牛

類棋子前文より

人の世は常なるものならずや
 うつろふ角ありはけを流す所
 蝸牛海のさうなる運せす利
 細くやわりの角をうらふり
 根柢の葉やうき角のき蝸牛
 文七うらふききり座のかつろ
 去るきや角小眼をさる蝸牛
 板木のあうらうらうたふ熱未
 つらうら火多き屋の隅は器具
 うた刀の換りふりしりてけり
 ちりをちりし人の衣やあう
 君もせうまのあうらうらう

高
 生角
 龍
 龍

蛤

雨蛙

蚊

蚊遣

イニ
トアリ

あうらうの兵器持ちのあうら
 うらうら中なる心うらうらける
 あうらうら運了あうら古具足
 雨後
 雨蛙をばあうらあうらあうら
 火をばあうらあうらあうらあうら
 林のあうらあうらあうらあうら
 あうらあうらあうらあうらあうら
 あうらあうらあうらあうらあうら
 平のあうらあうらあうらあうら
 あうらあうらあうらあうらあうら
 生死去来

中
 高
 生角

鳥羽の歌

夜讀書

故きう作や柳うきる木の字カサ

宗其の句をきりて

柳のつとつを柳ゆきとせ

あつしや座の故詩人を信う

柳のきりてはうやうの故

美人の情小まの故を柳

うきうきうの故

座の故や柳うきる座の

故き木や斧小女の石をうり

木津

此句は唐紙に改を源の
ふ書かすうり自註
あり

いさゝの故きを中み信ひきり 去来

血をわきしきききき故の故き 去来

うち故きききき

哀きよりおふいえぬ故きうれ 去来

情き角母

故きふいなきききき悔きうれ 去来

故ききききききききき

情きききききききき

の中

うき人の故ききききき 去来

佛哥表

去来きききききききききき 去来

虫

夏雜 夏小冬二月ハあせりる
さうりやうと源ナノえト
二句アリ

笈日記ニひらりる一葉が
ア美濃稻葉山の吟ナリ

シト奥ノ方言ナリ句モ又シニ
後テヨムヘシ泊船原ウニ譚

蟠八春上トモ紀行ノ時節
テモニ出ス

明後も志す山和樓ノ館のり 玄来
角をんて物なき山和楼ノ夏 霜

武隈の松あり
振らり松をみよまを三月まじ

山路 少々

夏草もみ只をりつ葉のひらり此

尿前 山家

帯風馬の尿 此をみよまをりつ

書 吉

箱茶ハ高も紙衣の羽母り此

清風 高

と此をみよまをりつ下の境のり

會盟

交りのまめり又より一及料理 中角

酒量も能波不居をうりつ

門より高り自由あり 玄来

葉お名取の形不入中物表方

能波ハらりつ中物表方

より一里まをりつ左の方まをり

とつふおりありつ中物表方

まをり五月色をりつ中物表方

色 少々

冬高もりつ中物表方
まをり三十りのまをり中物表方

五月 接装ニハまをりトアリ
細道ニまをりトアリ

行状記箱根関越の吟
ヨシ

同中の時中
五月甲士

越越

篠素恒の
五月

たよく
五月

この園

町中の山や
五月の上り
又

病中自詠

五月雨
高

五月雨
高

阿武隈川の水

五月雨
高

五月雨
続歴粟三自詠
真蹟
イニ自詠
誤りか

中尊寺

五月雨の陣跡
五月

五月雨
五月

五月雨
五月

五月雨

五月雨
五月

五月雨
五月

五月雨

五月雨
五月

五月雨
五月

五月雨
五月

五月雨
五月

後日記
韻塞
葉畠

有磯海三空吹せりて
書損カ

木賀温泉

炭俵ニ端千ト前書アリテ
傘小付トニ作ル

よふ人の許小あり

五月雨の雪吹地を大井川

雪う卦ふたのきや

雪の同書

さみちをふきいりぬり松葉

五月雨や河の掬ふ水や

さきとふせふねをきかぬへし

五月雨や君ちかぬのうき世を

五月雨や傘小付る小人形

少歌を地敷の大法子を赤敷

了あまき

五月雨の雪は休むの法の意

さみちをふきいりぬり松葉

五月雨の雪吹地を大井川

雪う卦ふたのきや

雪の同書

雪の同書

さみちをふきいりぬり松葉

五月雨の雪吹地を大井川

雪う卦ふたのきや

雪の同書

伏見持木所

炬形あつて世を色をけりも

雲をよくの古風形人

詞書豫集ニアリ

五月間

入梅

入梅晴

句集をちまれ
うらま集入誤

け燈てあゝぬ送る秋ま月白
湖の水あさりきりきりまきあえ
ま
ま

まきの味あえ

けさうもまをきり坂やき月白

五月白うらまあねの八雲目

ささもれの鹿をささわ松ひう

何をまきう 涙露 けんさ月白

旅人をあそれさ

岸坂やまのま月のめうう馬

たままのーら入る梅面う水

信濃の洗馬

入梅をさのこくくーまやちまれ

ま

馬王寺あり

幟

為の太刀の五月あつされ紙のあり
あまのの末紫跡ー紙 懐

多程古布を穿り多程古布

ま

あゝ是も岩を放つーあゝう水

あゝふ人うあゝ世を化のさー旗

棟佩

標

棟 伴うわささめーや芝者

ちやうきゆふは子みまむ旗 髪

まもあく口上もあー標 玉 籠

標一ふき全所納ありま

編みうーうーあまをさ

嵐を

ま

嵐を

糝をりまゝはうはくのきむきむ

廻文

菖蒲酒

加茂豆揃

市々たんとのあや菖蒲の馬田酒
落たこの跡ふ田まらや足る終ひ

其角
嵐雪

年の幸々の月年の日年の時
う市小入る

競馬

競る坊う入方のいきまの坊

竹植

本因字竹跡日

降まらぬ竹う志る只みのま

其角

若竹

苗雪や竹も跡りの人あつ坊
若竹や鞭うわのめる若根山
子小つをまらぬまらぬ竹

其角
木子

合歡花

細道三葉浮下作
泊船ホ有十二作八

棟花

曇鏡や若竹をゆく山はま
象沿や角う西捲り縁むのそ
そとま小中らうひそ
らんまうとあふちや雨のそまをり

其角

望相お

雪見の雪縁念まのりり日る照の

其角

切落者

世の人能見つすぬま和杉の栗

其角

あわあ生り杉の鞆の弱

カズ

其角

留別

あわあ生り足小法らん草鞋の結

ほし小生りおとそをう月四日

粟花

伊達衣智丸系
あめくくぬ下り

菖蒲

延宝年中

是ト讀誤りカ

志保取馬をんる五日も十日も

つゝ

是あや先一様小枯し一赤馬う水
結向を沼不ふし大る着蒲う水
其角

根よりや清化しうあむをを

五月三日わらわしせう家少く

屋根落しとあんんうあまあや外

切しと元あつひとん事りま阿や外

公門う入る付

着蒲わつひり陸子のみとうう水

志保し屋のま屋しく小あわめり水

ひと力えんあわあつの九日

其角

石菖

紅花

西花集ニ公羽の白
ナルヨシ云り

あわあつ子か茂の仮持里歳日
白露を石菖小をり候う水
其角

清風亭二句

行末ハ誰う形あせんおのそ
肩挿を扱をの帯小しておのそ

扇より買や物うそを夕日影
其角

大伴の神うあつ

あつあつあを五葉うそを名を松
其角

子冊より

まああをやあを少屋の別中あ

まああをやあを少屋の別中あ

あつあつあを少屋の別中あ

あつあつあを少屋の別中あ

瞿麥

紫陽花

百合

藜

田植

正成と傳
鐵肝石心は人の情

あまのそよよの後の種のお
るるのそよよのそよよのそよよの

とる言

やうきん蒸の扶くあまのそよ

芳甲

田一ねらあまのまきまき柳のそよ

障子の名ふく心小まきまきまき

まのまきまきのまきまきのまきまき

あまのそよよのそよよのそよよの

ぬねらあまのそよよのそよよの

在学高等科子の芳麻を

鼓くこの陽冥をあまのそよ

あまのそよ

風流のそよのそよのそよのそよ

藤田氏の言

あまのそよのそよのそよのそよ

あまのそよのそよのそよのそよ

あまのそよのそよのそよのそよ

尾のそよのそよのそよのそよ

あまのそよのそよのそよのそよ

あまのそよ

あまのそよのそよのそよのそよ

早苗

代掻

瓜花

水鷄

雪丸ニまよふ
をより

河津松は光少を古き七歌
水の舟きつの中て下ふ是後の歌
籠を置けり玉生より落る葉を
機函より出たり

瓜の花雲いづかき日まをせくさ

菊の葉も一度瓜の花の葉より水

初雁のあそびをなまめぬ

夕山も朝山も清のよそうりの花

白川も信阿のふ文を清くそ

まきりふ

冥土の志を水鏡不同をうその

大伴御仙

赤あたる水鏡ゆきぬる影の形

露川うらむのうはなまきりそ

送るも定ぬる陸士山田氏ら

字よりうりてほむ

水鏡ゆき人の心もわはるる

自愧

秋もりの母森さうき水鏡ゆ

水鏡ゆく秋もり遊河のつら

水鏡ゆく時ら水鏡ゆく

仰木の里

秋ののきりの尾や水鏡の破の雲

水鏡ゆくや掛波をきく雲の上

水札

小鳥ニ似たり水鷄
スルハ非ナリ

鳴浮巢

鶯音入

照射

仲夏雜

六月

水無月

あまのりつり

内川中流のりき菜小あくらら

昔の昔をいふやふらりし

弓技うねるゝのゝをりし

五月高うゝ衣巻ひし母を

今月や峰小雲おあらし山

水望月ハふく病やうゝ水

水望月や綱ハあきゝる海鯨

徳園殿のうゝ屋しつふき

ん

杉の葉も青六月のほ枝のれ

水望月の年うゝりし生島

其角

嵐堂

、

、

、

、

、

、

其角

玄来

氷室

炎天

暑

泊船ニましましむトアリ
暑き日再繁ナリ

新風風流

水の押く氷室をらぬ柳のれ

晴れはけ柳を送りて

笑えりあけ神村うゆり金

松の心志をうゝあきまのれ

あつまきを海小入たり金上川

む雨の木城小通る暑さうれ

小女の帯小まゝあつまう南

信丸節々柳一扇

新風の木屋へ入る暑さうれ

檜村の崎をるる小木陰うれ
あま砂の上り漁又のうゝり

翁

女学

病

其角

このふまゝにひるきものごとく
と利はる

雲り付く雲のうらみあやし海の上
 地をたう地あらしきさるる君のれ
 朝の木の二葉ふうくそ雲う水
 石も木も岬あはゆるあつたうれ
 羨濃然板人足のかしら
 夕まゝく吹や人足のかしら
 甲一團あつた
 夏の帯を巻素もを名ぬ帯茶
 葉のくせをよみ帯あつたの君が
 夕まゝあつたゆふまゝのあやうれ

烟雨村

夕まゝや洗ひはる帯たる土の色
 白く福海の花廣き白むれ
 うくむきくもの
 夕まゝく帯あつたあつた帯の形
 帯のあつたあつたあつたあつた
 牛島と遠の神あつた
 雨をまゝにまゝにまゝにまゝに
 夕まゝや田をまゝにまゝにの神あつた
 夕まゝよしうかあつたあつたあつた
 海月々原小池あつたあつたあつた

自註 翌日雨あつた

白雨

六五
六六
六七

西濱ト前書アリ

笈日記ニ在りて云々アリ

削之并忘水ニ
初葉飛舞の風云々

布袋画賛

まじしき誠意高き一を極する也

涼しきや木のこゝろ月の明黒山

小圃さき柳さき一や海土り軒

十八樓祀あり略吉

はあさうし目小見ゆきその時さし

聖水の新宅

まじしきハ指さし見えゆるけいふれ

雪芝之寺

涼しきや木小聖物り枝の形

聖明之寺

まじしきま後不字しきう暖味の林

まじしき練歩の指のりよまら

其角

許六戯別文アリ畧ス

まじしきや木あさうし聖の流をそ

まじしき人の子をめそ

まじしきいさ森さうし新夢心

木乃後まじしきま味をまそ

夕葉流まじしき風の整り形

水車の葉まじしき

涼まじしき心さうし水のま

埋火をまじしきあさうし粒のうれ

法東堂の堂まじしき真光寺

必素并此の何

まじしき聖の山まじしき急松哉

崋雪

玄来

井の山家

是や水も白く人下も
、

河子川案々吟詠

舟人あ舟あきあき水
、

河原少々

曉を牛まへまゝ車
、

布袋の袋

舟にうちをり依り
、

麻葉

誰か舟を動かす
、

川原のまゝ

舟も水の流るる
、

大由の火を返す
、

夕暮み病を起す
、

立歩行人小舟を
、

舟もちハ舟り
、

更なる舟を渡す
、

橋の子船中若
、

紙何の夏代
、

此所小と市
、

此手本葉斐
格
初輩心スレ

しふ門系化押出 細き
馬ののきふる矢の根立のき
了りき武士ありまの庵不
いしへの弓掛松の古木
今もあり

美し流やまひき門のき流
はつまの帆ふふ袖や流る舟
あゝ壁や水を言をゆく夕涼
そ外の花ゆきや澳の屋ま
接果しまのあや松の内
まをまのふ歌を

青嵐

海程のきり松のあじや初瀬山
し角

風薫

盛信草ふたり

茶湯ニめくくそ風のきき
初葉ニヤ

青あじの空ありや苗のき
義仲等師父の歌
きふり水那のりきふうをまあじし

風のきやふふらり 宮上川
羽星山あり

ありうゝや雪をうきくも南岳
游力亭

流や風のりをりのお柏子
小倉山院

松栢をふめくや風のりをるき
石川山あり

風をる羽後ハ襟は流るるを
句撰ニ羽後ヤア

泉

百無 泉ハトアライニ清水
カトイニ又苗ノミヤヒナリ

土用干

可乞

六五川 高野のふき清水の取 去来

古きふよりぞわが山ふびくくあふ 福

千子つたふよりりやぶるを少く

この國より去来うかへりき

ゆりあふ

なき人の中神もいふわが用也し

うたを藤わが柳屋小似もよ土用干 去来

ねえをききてあつてなをう土用干

ねえ一時の松うあ申ふし

あふ人の子木もなきや土用干

謹言てつたせたらさん土用干 去来

白乞の雨と守めをくつかりあふ 去来

梅本素を立也

雨乞ふ先出らるや破せを

白乞り馬きあふや不二まうや 去来

餅小のう人ねきあひのね

あつてうもあふのきをひのね

本留主馬の亭小招せり小太

夫の家名を移して

花のあふ用をうあをねや面の舞

枝あつてあふうあをねやのね

澄金う傳ををりあをねのね

浦舟の路い小白あをねうね

蓮

祭

富士詣

福

去来

遊女小景画儀

藻花

萍

青田

麻

田草取

青酸漿

洋

晝顔

夕顔

藻の花や花小葉は花よりさきよ水

花葉

浮子の葉よりさきよ水

草花や青田をさるる屋の窓

花の葉の中を青田のさきよ水

花葉

焼餅の葉の中をさるる水

麻の中をさるる水

花葉

花の葉の中をさるる水

甲斐の中

山妙の隅に閑るむらさき

花の葉の中をさるる水

花葉

花の葉の中をさるる水

花の葉の中をさるる水

花葉

花の葉の中をさるる水

花の葉の中をさるる水

花の葉の中をさるる水

花葉

花の葉の中をさるる水

花の葉の中をさるる水

湯を書たり句とたのむえ
了るお用句を書けり

夕顔や一白の出来玉の病
去来

ゆふのあや名をわくしなるあ形
去来

落椿何ののち移さる病
去来

了橋柴山杉の下凍る世途の
去来

熱をぬくさむあさる
高

ゆふのあや名をわくしなるあ形
高

去来うお存少
高

朝露うよとれて凍る水の泥
高

雨の皮むくしとあけやさき玉
高

凡

初茶の土下り

鬼のやうなる法師あつちの
高

下るくくそ神小の丸
高

あきまはつし何のうけを
高

とふ女抱きしそ漸生の心
高

あけよとさきふも送るを
高

——あ——

箱巻の良養生や血をくけ
高

干所やうらむあや名をわくしなるあ形
高

雨の皮むくしとあけやさき玉
高

八幡左郎 撰

御堂宗白殿の物忌小義の朝臣
高

高野の耐南都より早所をわくし
高

秋近

御稔

と事なき事なり

秋の気も涼しくもや四時半 菊

大雨大風

吹降の多相ふりゆく 清稔引 其角

清稔

とらの目を赤山の海より出
西北のつらさをさす 昔の夜
の夜もあつては園の法もさ
あつくやもあつてさうさうの神
をさるりゆるるるのやま海の
あつては限りぬく相もえ
衣後も契き物もあつて

夏雅

いそぎの海息つたて 夜も人 菊

夜も人 目のけりや 清稔引

井持氏水橋

世の夜や水水ゆるく 水橋のうら 菊

鹿の宮

客棧のうらまふ夜のま 鹿 其角

ひや酒やまの下の名た 鹿

野や花ハタアをさぬ 鹿

相承り田舎をさるや 鹿 其角

まろろろ 相承のま 鹿

夏畑よりわく 鹿

鹿

此乃...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

此係...
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...

藏

